
屍ヶ台

骨休め

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

屍ヶ台

【Nコード】

N7532X

【作者名】

骨休め

【あらすじ】

屍を食うこと。食うために提供すること。それを実際に行ってきた土地が、現代にもたらしたものは…。積み重ねてきた人間の業を振り払おうとする姉弟の奮闘と末路を描いていきたいと思えます。

姉貴の家の訪問者（前書き）

この章にはグロイ表現があります。耐性のない方はお気をつけ下さい。

姉貴の家の訪問者

1章 姉貴の家の訪問者

「もう、本当に腹が立つ！」

結婚して家を出ている姉貴の、今日の第一声はそれだった。

少し前から頻繁に実家に電話をするようになっていた。なんでも、新居として住み始めた賃貸マンションの隣室から、子どもを虐待するような怒鳴り声が、毎晩、響くのだという。

「深夜の1時とか2時に、延々1時間ぐらい喚き続けているのよ、その母親。異常すぎじゃない？」

そんな報告を聞けば、無関係な独身男の俺としても、なんとなく心がざわつくものである。

「児童相談所に通報すれば？」

無難ながらアドバイスすると、俺よりはるかに血気盛んな姉貴は、「隣の子をつかまえて学校とクラスを聞き出したから、まず小学校に連絡してみる。それと、隣の家の玄関先で、『いい加減にしてよね、毎晩毎晩！』って大声出してやったわ」

と鼻息を荒くした。苦笑しながら、でも俺としては隣人トラブルで刺されたりしねえだろうな、と心配になってみたりもした。

その姉貴の本日の怒りの要因はこれだ。

学校に連絡を取ってから数日、隣家の声は聞こえなくなった。一昨日には地区の民生委員も訪問していたそうだ。地域絡みで虐待阻止に乗り出したんだな、と安心した姉貴は、昨夜も達成感から健やかに熟睡していた。

深夜2時。なにかが聞こえたような気がして目を覚ました。夜中の物音には敏感になっていた。耳を澄ますと、ぼそぼそと喋る複数の人間の声が聞こえる。玄関先から。

仕事で疲れている旦那を起こす前に、正体を見極めてやろうとし

た姉貴は、こつそりと玄関に歩み寄った。覗き窓から外を覗くが、暗いばかりで動くものは見えない。声は途絶えている。気配もない。気のせいだったかと身を離れたとき、突然インターホンが鳴ったそうだ。重なるが深夜2時。尋常じゃない。

「ヘタレだと思うけど、怖くて玄関、開けられなかったわよ」
そう意気消沈する姉貴に、

「絶対開けんなよ」
と釘を刺して、その日の会話は終わった。

次の連絡は翌々日。

会社から帰ると、お袋が受話器を握り締めながら青い顔をしている。何かとそばに寄ると、姉貴からだという。精神的に弱いお袋と電話を換わった。

「俺。今、帰った。どうかしたの？」

「あ、リヨウちゃん？ちよっと気持ち悪いことになってるのよ」
姉貴は、珍しく取り乱した様子で、畳みかけた。

「一昨日、話した深夜のインターホンだけど、電話したその夜も昨日も、続けて2時から3時頃に鳴らされるの。カイさんに出てもらったんだけど、こつちの動きを察したみたいで逃げられた後だった。今夜も来そうで、ちよっと滅入ってるの」

カイさんというのは姉貴の旦那だ。大手の自動車部品会社に勤める技術者で、毎日のように帰りが遅いと姉貴がこぼしていた。

「今度は調べに行く前に警察を呼んだら？もしくは監視カメラつけようぜ」

そう提案すると、

「監視カメラかあ…。やってもいいけど、明日になっちゃうよね。今晚、カイさん出張でいないのよ。どうしよう…」
と答える。

結局、お袋の後押しもあって、俺はその晩、姉貴の家に泊まりに行くことになった。

引越しの手伝い以来、久々に訪ねた新居は、すでに綺麗に片付けられていた。姉貴はむしろ潔癖症に近い性格で、俺の部屋が汚れているのも我慢ができません、よく勝手に物を捨てられた。非難する俺を、

「部屋の汚れは心の汚れ！」

と汚物扱いしたのも、今となっては、なんだか懐かしい。

「一応、ここに入る前に隣の家の物音を探ってみただけど、怒鳴り声とかはしなかったぜ」

と開口1番に言うと、

「うん。声は聞こえなくなっただね。でも、だからって虐待が止んではと言いい切れないじゃない？非常識な嫌がらせするような母親なんだし」

と答える。姉貴は深夜の訪問者が隣家だと確信しているようだ。

「複数の人間の会話が聞こえたんだろ？隣って家族何人？」

「母親と小学生の女の子だけみたい。お父さんは見たことない」

その説明に、俺は首を傾げる。深夜2時、母子家庭にわざわざやってきて嫌がらせに加担する物好きがいるんだらうか。

「ふうん…。まあいいや。捕まえりゃはつきりするし」

そう言うと、姉貴はホツとした顔をして、

「よかった。リヨウちゃんが遅しくなってくれてて」

と微妙な表現で褒めた。

「あ、でも、番してくれるのは嬉しいけど煙草は吸わないでよ。お風呂の排水口の髪の毛はちゃんと拾ってね」

釘を刺すのも忘れない。

相変わらずうるせえなあ。それが人にモノを頼む態度か。

0時を回って姉貴が消灯の時間に入った。俺も明日の出勤のために眠っておかなければならないが、なんだか目が冴えてしまった。電気の消えた部屋の中で携帯をいじりながら、耳を澄ます。

隣家からは何のアクションもなかった。もしかしたら、この後の悪戯に備えて誰かが訪問して来るんじゃないかと疑ったが、気味が悪いぐらい静まり返っている。

「訪問者、か」

姉貴に聞こえない声量で呟く。なんとなくゾクツとする響きだ。相手の顔が見えないから無闇な想像をするんだろう。インターホンが鳴ってドアを開けたとき、そこにいるのが目を釣り上げて怒りの形相を顕わにした母親だったらOKなんだ。いや、それ以外ありえないか。姉貴はお節介だが、間違ったことをして他人の恨みを買うような奴じゃない。

少し眠気を感じ始めた俺は、布団を持って玄関先に移動した。音を聞き逃して、姉貴に、また明日から怖い思いをさせるのもアレだし。

…足音がした。ような気がした。

慎重に起き上がると、俺は手元の携帯を見た。時刻は2時を少し回っている。

狭い玄関を挟んだ先にドアがある。その向こうから、やっぱり何かの音がする。妙に乾いた響きだ。足音とは違う。布団から這いで、厚い鉄製のドアに耳をつけた。話し声はない。カシンカシン、と、耳慣れないそれは、移動する気配もなく、この家の前に留まっている。

枯れ枝でコンクリの床を叩くような音だな、と思った。水分の抜けた物体が奏でる軽い振動。わずかの衝撃で簡単に折れそうな脆い質感。

唐突に思い出した。大学時代、ワンダーフォーゲルの部活動をしていた俺は、2年生のひと夏、先輩に連れられて山岳救助に携わらせてもらった。天候の良い日に限り、行方不明者の捜索に山々を歩きまわる。一般的な登山者が行かないような深い谷や雪溪にも足を運んだ。

「こんなことしても見つかる可能性はほとんどないんだよね」

とあきらめムードのプロに混じつての搜索の結果、1体だけ遺体を見つけることができた。鮮やかな赤いリュックの傍らに、完全装備した服装を身につけたそれは、すでに皮も内蔵も残っていないかった。風化したスカスカの骨になっていた。

骨の音だ……。穴だらけの石灰質の棒の羅列を思い描いて、吐き気がこみ上げてきた。表にいるのは、本当は何なんだ？人間なのか？インターホンが鳴った。俺は飛び上がったと思う。ドアノブを掴もうとしたが、痺れたように腕が伸びない。人間じゃない。そうとしか思えなかった。人間の気配じゃない。

どれぐらいの時間、葛藤していたのか。

気づくと表の音はなくなっていた。それと入れ違いに室内から控えめな足音が近づいてくる。姉貴が不安そうな顔を覗かせた。

「いま、インターホン鳴らなかつた？」

俺は弾かれたようにドアを開けた。

共用通路の常夜灯が、すでに誰もいなくなつたコンクリートの床を照らしているだけだった。

生者が死者か（前書き）

い。この章には遺体の表現があります。耐性のない方はお気をつけ下さ

生者が死者か

寝不足の目をこすりながら出社した。地方都市のオフィス街に、俺の仕事場はある。

地下駐車場に車を突っ込み、エレベーターの上昇ボタンを押すと、急に脱力感が来た。睡眠不足のせいじゃない。過度の緊張感から解放された自覚が芽生えたせいだ。

朝まで姉貴宅で過ごした俺は、ちゃんと主婦をしているらしい彼女手製の朝飯を食って、マンションを出た。ドアを開けるときに、まざまざと深夜の物音を思い出す。見送りに出ている姉貴を何度も見返ると、

「何よ？うつつとうしい」
とケチを付けられた。心配してやってんのに。

骨：いや、俺の妄想の中で、訪問者はもっと確実な姿を持っている。口を大きく開けた頭蓋。欠損している肋骨。粉を吹いた骨盤。折れた大腿骨。山の中で見つけた遭難者は生きて帰りがかった未練を全身で表していた。玄関の向こうにいた、あの質量の軽い存在は、生きている人間と同質の立場に見せようとしていた気がする。

「幽霊や妖怪なんてものが本当にいたとして…なぜ、それが姉貴のところにも現れたかが謎だよな…」
あちらを立てればこちらが立たず。超常現象で推理してみても答えは出ない。

オフィスのドアを開けると、すでに出社していた先輩社員が、
「おはよつす。なんだ？冴えない顔だな」
とからかってきた。

「ちよつとあつてね…。あんまり寝てないんです」
答えると、

「一晩中、何があつたのかなあ？」

と下卑た笑いをぶつけてきた。

「そんないい話じゃ……」

苦笑しながら言い訳する。

そここうするうちに、後輩の彩ちゃんあやが入社してきた。俺の顔を見るなり、

「どうしたんですかあ？顔色が、青いって言うより白いですよ」

と驚いた。そんなに病的な症状なのか、俺。

「あんまり追及するなよ。一晩中の作業で衰弱しきってるんだから俺が答えるより早く、先輩が茶々を入れる。」

「違うつ。泊まったのは姉貴のとこだって！」

彩ちゃんの前で恥をかいたことに感情的になって、思わず声を荒らげた。

「お姉さんって、この前、結婚した？新居に泊まるなんて仲がいいんですね」

屈託なく笑う彩ちゃんは、その後、こつそりと、

「妬げちゃうなあ」

と呟いた。大きな瞳を伏せる仕草にドキツとする。

朝の定例業務をこなし、次の波が来るまでの時間をぼんやりと過ごしていた俺に、先輩が話題を蒸し返してきた。

「お前って彩っぴ狙いじゃなかったの？本当はどこに行ってたんだよ？姉貴の家で寝不足って変だろ」

こそつと耳打ちに忍び寄る小太りの体を押し返して、

「だから違うつて」

俺は半ば笑いながら否定した。

「隣人トラブルってやつですよ。真夜中にインターホンを鳴らす非常識な馬鹿を捕まえようと思ったの」

「そりゃあ悪質だな。姉ちゃん、そんな馬鹿に絡まれてんのか」

「あの人も喧嘩腰なところあるから……」

身内として、少々、姉貴に厳しい評価を下すと、彩ちゃんが聞きつけて寄ってきた。

「お姉さんに何かあったんですか？それで泊まったの？」

結局、俺は2人に顛末を話すことになった。

「なんだか妙な話だなあ。嫌がらせなら、もっと恫喝的なことしてもおかしくないんじゃないか？相手は複数なんだろう？」

先輩が珍しく真面目な顔で反応する。

「でも、お隣さんですし、自分の正体を知られるのは嫌なのかも」
彩ちゃんの見解も、至極、的を射てると思う。

「自分の立場を守りたいなら、俺なら、むしろもっと恐怖感を与えて話もできないようにさせるぜ」

「先輩は過激すぎですよ」

俺は割って入った。彩ちゃんの先輩を見る目が変わりつつある。

「訪問者が誰だって、今日にははつきりします。姉貴、今ごろ監視カメラを買いに行ってるはずだから」

そう説明すると、

「よかった」

と安心する彩ちゃんの横で、

「誰も映ってなかったりしてな」

とニヤつく先輩。

…もし、本当にそうだったら…。

…幽霊が訪問してくるなんてこと、本当にあるんだろうか…」

一笑に付されると思って黙っておいた仮説を、思わず口にした。

「マジで受け取ったの？んなことあるわけないだろ」

嘲る先輩に対して、意外なことに彩ちゃんが俺を肯定した。

「そういうの、ないとは言えないんじゃないでしょうか…。だって、

今朝の水嶋センパイの顔、生気が抜かれたみたいだな色してた…」

俺は自分の顔を触ってみた。ちゃんと体温も持ってる。疲れも回復している。

「とり憑かれたみたいだった？」
笑ってそう聞くと、彩ちゃんは、
「ちよつと心配になりました」
と控えめに微笑んだ。

その流れを傍観していた先輩が、いきなり俺に受話器を突きつけた。

「あのお、ちよつと面白くない、そういうの？ 『実録お化け屋敷！』
みたいなの」

「人事だと思つて…」

調子のいい言葉に苦笑しながら、俺は受話器を受け取る。

「それでどうすればいいんですか？ 寺にでもかけて悪霊退治頼めつて？」

「違う違う。かけるのは不動産屋」

先輩は自分のノートPCを手繰り寄せながら言った。

「よくあるだろ。そのマンションが建つ前は墓場だったとか沼地や井戸があつたとか。それ、確認してみろよ」

「不動産屋なんか知りませんよ」

受話器を突っ返そうとすると、先輩はそれを遮って続ける。

「マンション名ならわかるだろ。検索してやるよ」

結果。大手の住宅情報会社がヒットし、俺も悪ノリで事故物件の是非を追及することにした。

会社を退社すると、そのまま姉貴宅に向かう。監視カメラの設置をしてやらないといけない。

「意外に安いよね、こういうの」

警告灯付きの丸いフォルムのカメラには数千円の値札が付いていた。それを玄関のすぐ上に取り付けたあと、別売の受信装置を室内のビデオに繋ぐ。

「これって録画OKなんだよな？」

確認すると、

「って店の人は言ってたわよ。白黒だけど」

答えが返る。録画機の電源を入れると、接続したモニターに外の様子が映し出された。

「よし、成功。明日の夕方また来るから、そのときに一緒に確認しようぜ」

促すと、姉貴は怪訝な顔をした。

「その前に見ちゃだめなの？」

不動産屋からは、特に手がかりは得られなかった。しつこく粘ってみたが、マンションが建っているのは山地を削りとった岩盤の上で、災害にも人災にも見舞われたことはなかったらしい。その回答を聞き、俺もいったんは「やっぱり隣か」と納得したんだが、このマンションに戻ってみると、言いようのない胸騒ぎが襲ってくる。

ビデオに映った『もの』を、姉貴一人のときに見せたくはなかった。

「もし想像しないものが映ってたらショックだろ？」

軽口でごまかしながらそう答えると、姉貴は、奇妙に真剣な表情で尋ねた。

「それって…鳴らしてるのが、隣の母親じゃなくて子どもの方ってこと？」

「は？」

質問の意味がわからない。

「深夜2時だぜ？子どもが起きてるわけないだろ」

否定すると、

「でも…」

と言いあぐねる。続きを促すと、姉貴はくぐもった声で呟いた。

「なんていうか…気配がね、小さいのよ。大人の大きさじゃないみたいな…」

「……………」

心当たりは…あった。軽い骨のような音の羅列は、子どもが跳ね踊っているようなリズムを刻んでいた。

俺は姉貴に向き直って、俺の想像と不動産屋の回答を伝えた。顔をしかめて聞いていた姉貴だったが、一瞬、パツと目を見開いたあと、

「そっだ！」

と笑顔になった。

「そういうこと知ってそうな人が近所にいるわ。95歳のお爺ちゃんなの。おすそ分けに行ったりして顔を繋いでるから、話も聞かせてくれると思う」

次の俺の休みに合わせて、その老人宅を2人で訪問することにした。

屍ヶ台 1 (前書き)

い。この章には食人の表現があります。耐性のない方はお気をつけ下さ

屍ヶ台 1

順調に週末の休みが取れた俺は、この日、95歳の長老宅を訪問するために、姉貴の家を訪れた。世間一般的にも休日にも当たる曜日だからだろう、いつもすれ違ってばかりの義兄あにきにも挨拶することができた。

「カイさん、久しぶり」

姉貴と同じ呼び方で馴染むと、若干、小柄な義兄は背中を丸めて、「久しぶりだね、リョウくん。君までサチの酔狂に付き合うとは思わなかったよ」

と妙に引つかかる返事をよこした。

俺は実はこの人をよく知らない。熱心に姉貴にプロポーズしていたのは見ていたけど、姉貴はむしろ、最初は冷淡だった。カイさんの情熱にほだされたのだろうか。男の俺から見ての彼の魅力は…まあいいや。結婚した後に論じる話題でもない。

「すぐにそういう冷めたことを言う。虐待の声を聞いたときもそうだったよね。関係ないからほっとけ、とか。カイさんは人間的に冷酷だと思う」

義兄の反応に噛み付く姉貴。義兄は軽く肩をすくめただけだった。夫婦げんかに巻き込まれるのも不毛なので、姉貴を促して早々にマンションを出る。

入り組んだ住宅街の路地を、いくつも曲がった。

「ここらへんは古くからの居住区みたいで、道が狭いのよね」
姉貴が言った矢先に、侵入してきた車が体側ぎりぎりのところを掠めていく。マンションから見るかぎり、一面のススキ野原に囲まれた開放的な土地だと思っていた。でも一步奥に入ると、こんなにゴミゴミとした風景になってたんだな。

近所という触れ込みだったが、ずいぶんと歩く。

「結構遠くない、その爺さんの家？」

姉貴の生活圈から外れようとしているのを見咎めると、振り返った姉貴は笑顔を作っていた。

「だって、うちのマンション評判悪いんだもん。近くの人はあるまじ親しくしてくれないのよ」

「……………何それ？」

意味がわからず問い返す。

姉貴の話によると、引越した当初から感じている違和感があるそう。マンションのそばには戸建ての家屋がいくつか散在している。近所に顔を繋いだほうがいいと思っただ姉貴は、それらの家々に機会があるときに向いて交流を計ったらしい。最初はにこやかに対応してくれていた相手は、姉貴がマンション名を口にすると、急に表情を曇らせた。中には姉貴自身に距離を置く態度を見せ始めた家庭もあるようだ。

「それ、かなり重要な情報じゃねえ？姉貴のマンションが近隣に疎まれてるってことだろ？その原因と訪問者の件が結びつくんじゃないか？」

勢い込んで言う俺に、姉貴は、

「うーん…そうかなあ…」

と懐疑的な返答をした。

「だって、うちのマンション、ゴミ出しのマナーも悪いし、不良学生が夜中に溜まったりもするのよ。そういうことで嫌われてるんじゃない？」

現実的な理由を突きつけられると、俺自身の考えも尻すばみになる。『幽霊屋敷』なんて遠因より『迷惑行為の横行』のほうが、近所にとっては、よっぽど敬遠する原因になるだろう。

両脇に立ち並ぶ家屋が、やや歴史がかってきた。住宅地の奥は、古くから人が住み着いていたとの説明通り、5、60年は経っていいそう。趣を連ねている。車が入れないぐらい細い小路。幹の黒ずん

だ路傍の柿の木。一軒一軒の敷地が広い。通り過ぎた屋敷の立派な門構えの奥には、日本庭園が覗いていた。

「爺さんの家もこんななの？」

ちよつと不安になってきた。親父を早くに亡くした俺たちは、金持ちの生活に縁がない。今日の服装は思いっきりカジュアルだし、それらしい話題も用意してない。

「お爺ちゃん…芳賀^{はが}さんっていうんだけど、芳賀さんの家はこのへんで一番大きいよ」

構えたふうもなくそう答える姉貴の格好は、エプロンを外しただけの内着だった。

「俺、失礼に当たらない態度なんか取れないぜ？」

そんな爺さんにどうやって話しかけるっていうんだよ？臆していることを伝えると、姉貴は高笑いしながら、

「大丈夫よ。リヨウちゃんがビビるような人に、私が話しかけられるわけないでしょ？」

とフォローした。俺はお前のほうがよっぽど肝が座ってると思ってるよ。

瓦屋根の乗った格子戸の門扉を開けると、姉貴は慣れた調子で、砂利の敷かれた庭先を横切った。平屋の堂々たる日本家屋が目の前にそびえている。磨りガラスを嵌め込んだ引き戸に手をかけてから、思い直したように、すぐ横に設置されたインターホンを鳴らした。

「いつもは挨拶してそのまま玄関に入っちゃうんだけど、今日はあんたも一緒だもんね。一応、礼儀」

人懐っこい姉貴の態度は、出迎えてくれた芳賀氏の家人の対応で納得が行った。

「やつと来た。待ってたわよ。お爺ちゃんも朝からご機嫌だったんだから。さ、上がって」

50前後の穏やかな雰囲気的女性が俺たちを招き入れてくれる。年代と会話からいって、芳賀の爺さんの孫ってところか。軽く会釈を

してついでいく俺の前で、姉貴と女性は華やかな声を上げながら世間話を始めた。そっか。そういえば姉貴は独身時代から男女問わず人気のある性格だったな。

襖で仕切られただけの部屋が、奥に向かっていくつも並んでいる。「本当は客間に上がっていたきたかったんだけど、お爺ちゃんがどうしても自分の部屋に来てほしいっていうもんだから。ごめんなさいね。こんな薄暗いところまでお通しして」

女性、やはり芳賀氏の孫娘だと名乗る彼女は、俺に向かっても親しげな声をかけてくれた。

「いえ。こういう造りは珍しいので、拝見できて喜んでいます」俺が答えると、姉貴が口を挟んだ。

「歴史に興味が有るくせに、資料館みたいなどこにはあんまり行かないのよね、リョウちゃんは」

そうだ。今日の俺の立場は『歴史好きで郷土の古老に史料を提供してもらっているアマチュア』だったな。

「江戸の宿場町の本陣みたいな資料館にはよく行くさ。でも、実際に人が住んでいる家屋は貴重だろ」

そう言い訳すると、孫娘は感心したように、

「本当にそういうものが好きなのね。わたしなんか、こんな家に住んでいても、ちっともありがたさがわからないから、尊敬しちゃうわ」

と言ってくれた。本当はボロが出ないように内心ヒヤヒヤしてるんだけどね。

10以上の部屋を通った気がする。どの部屋も縁側から差し込む陽の光が、障子を通して室内に流れ込んでいた。現代家屋のようなサッパリとした明るさはないが、控えめな白い波長の光源が心地良い。

爺さんの居室が一番とっつきにあった。孫娘が襖を開けると、そ

こだけ、障子窓のない陰気な闇が漂っている。

「こんにちは、サチさん。待ってたよ」

床の間を背にした老人が、ゆっくりとした動作で立ち上がった。背が高い。高齢を感じさせない姿勢の良さに、俺は目を奪われた。90を越えて生きる人間ってというのは、やはり、こんなふうに頑強なのかもしれないな。

「こんにちは、芳賀さん。こっちが話してた私の弟です。今日はお世話になりますね」

姉貴の紹介に、雰囲気呑まれて呆けていた俺は、慌てて頭を下げた。

「涼二といいます。時間を取っていただいても」

間抜けな挨拶を後悔しながら老人をちらりと見ると、無表情だった顔に笑みが差していた。

「サチさんに似て礼儀正しい弟さんだね。しかも、若いのに勉強家なんだろう？会つのを楽しみにしていたよ」

とりあえず批判的な態度を取られなかったことに安堵しつつ、でも姉貴の図々しさと同列に評価されたことに対して不満を感じた俺は、

「姉よりはるかに礼儀は心得ているつもりです」

と爺さんの言葉を訂正した。即座に姉貴から無言のパンチが飛んできた。

大きな座卓に出された茶と菓子を脇によけ、爺さんが古書の類を次々と積んでいく。町の郷土史。古地図。古文書。そして先代が書いていたという日記まで。

まさかマンションに現れるお化けの由来を調べたいとは言えなくて、便宜上、俺の興味と引っ掛けての来訪だったが、歴史に対して俺はあながち無知でもない。と言っても高校の日本史レベルだが。

学生時代、史跡巡りを趣味としている教師に授業を受け持ってもらえた縁で、教科書の活字でしか情報を与えられなかった同年代よりは明るい知識を持っている。…はずだ。

「この辺りは、昔、山だったと聞きました。それを削って宅地にしたとか。いつ頃のことなんですか？」

尋ねると、古老は、それがつい昨日だったかのような俊敏さで記憶を取り戻した。

「儂が生まれる数年前だから、明治の末期の頃だろう。それまで、この土地は…山というよりは小高い台地だった」

なるほど。俺は頷いた。不動産屋の説明と一致する。今では周辺の土地との標高差はないに等しいが、山地だった頃は、木も生えない硬い岩盤の斜面が覆う、ハゲ山、だったそうだ。

「芳賀さんは、その明治末期の開拓以前からこの場所に住んでみえたんですか？あまり住居には向かない環境だったと聞いていますが、踏み込んでみると、爺さんは能面のような無表情になり、黙って古地図を開いた。手書きの細かい地名がびっしりと書きこまれている。『荒谷』『石神』などの文字が複数見えた。

「この辺りは粘土質で米が取れず、水はけも悪かったから、雨が降るとよく浸水したらしい。儂らのご先祖も、他所の土地を追い出されたのでなければ、こんなところには住み着かなかっただろう」

言葉の端に微かな悪意を乗せて、そう生き字引は切り出した。そして、数百年にも及ぶここでの過酷な生活を語り出した。

屍ヶ台 2 (前書き)

この章には食人の表現があります。耐性のない方は、重々、お気を
つけ下さい。

屍ヶ台 2

明治45年7月30日。岩盤の掘削に当たっていた鉦夫たちは、その手を止めて新聞に見入っていた。『天皇崩御』の大きな見出しが一面に謳ってある。

「具合が悪いとは言われていたが…やつぱり亡くなったんだなあ…」

「明治はどうなるんだ？次の天皇は嘉仁様か」

「年号は変わるだろう。そういう決まりだ」

思い思いの話題に終止符を打ち、また鍬を振るい出す。明治天皇、睦仁が病床に倒れてから、自粛ムードの蔓延する中で仕事ができなかった。予定よりずいぶん遅れている。

「こんな住みにくい村を開拓してどうしようっていうんだ、お役所は？」

自然とこぼれる愚痴。硬い地面を掘っても掘っても、現れるのは岩の亀裂だけ。麓には集落があつたが、総勢で60人ほどの過疎地である。手を入れる意味はないように思えた。

「なんでも、ここは屍体の投棄場だつたって話だ。役所としても、そんな土地を残しておきたくないんじゃないか」

年嵩としかさの行った鉦夫が抑えた声で言うと、反論する者もいなかった。

この土地に芳賀氏の一族が住み着いたのは室町時代だったらしい。当時、芳賀氏は別の土地で地頭代を務めていた名家だった。

地頭というのは、と爺さんが改めて説明してくれた。平安末期から室町にかけての動乱の時代、時の権力者たちは、自分たちの優位性を安定させるために、穀物の取れる土地の所有権を欲しがった。幕府はそういう権力者たちを統率し、支配下に置くために、忠誠を誓った大名に、それまでに各々が手に入れた土地の所有を維持する保証を行った。つまり、絶対的な力を持つ公的機関が、曖昧だった不動産に対して登記を行ったということだ。

土地を与えられた権力者（当時の言葉で御家人と表現したらしい）の中には、自分の住居のある都から遠く離れた場所の管理を強いられる者も少なくなかった。それはそうだ。群雄割拠の中で手当たり次第に略奪してきたものなんだから。幕府が確立し、都に中央政權が集中したからといって、都合よく近場の土地とトレードするなんてわけにはいかない。そういう地方の僻地を管理するのに、本来なら、御家人自身が該当地に出向き、生活をするのがもっともシンプルな方法だった。けれど、幕府との連絡を密にする必要があったために、当人が都を離れられないケースも多かったのだ。そういう場合に、御家人は自分の親族などで構成した『管理者』を現地に赴任させた。それが『地頭』である御家人の代わりを務めた『地頭代』である。

初期の頃こそ、本領者である御家人の指示を忠実に聞いていた地頭代たちだったが、時代が下るにつれて、自身が土地の所有者であるかのような横暴ぶりを見せ始めた。年貢を納める際に本領者に申告する出来高を過少申告したり、法外な課税を小作人（実際に耕作していた百姓）に課したり。また、徴税だけでなく治安の安定に対しても権力を与えられた結果、年貢に反対する小作人たちを武力で制圧するようなことも行われたようだ。

大きな財を成し、栄華を極めた地頭代の時代が終わりを告げたのは、豊臣秀吉が行った太閤検地によってだった。秀吉はこの制度改革で、年貢を本領者に直接納めさせるといふ手法を取った。このため、中間管理職の地頭代は職を追われる羽目になる。

典型的な搾取者であった芳賀の一族は、本領者である御家人の元にも受け入れてもらえず、管理の厳しい豊臣、徳川の支配下の中、耕作に向かない荒地への定住を余儀なくされた、とのことだった。

「因果応報とはいえ、酷い時代だった」

爺さんは、話を始めた時と同じような凍りついた表情を、皺だらけの顔に浮かべていた。俺は、その中に、伝えてはいけない言葉を口

にしようとする決意を感じた。犯罪を告白する前の人間は、きっと、こんなふうは無情な冷たい風貌を覗かせるんだろう。

「儂らの先祖が住み着いたこの土地には先住者がいた。樹木の恵みのないここは、常に風害と水害の脅威に晒されていたそうさ。そんなところに定住していた先住者がまともな人間たちじゃないのはすぐに知れたが、それでも先祖たちは、やっと受け入れてくれた土地を離れることができなかった」

自らも多大な罪を犯してきた一族が共存した相手は、でも、話が進んでいくうちに、俺の想像をはるかに超えた醜怪な輩たちであることが伝わってきた。姉貴は心なしに青ざめながら、吐き気をこらえるかのように口元を覆っている。

室町時代末期。太閤検地が浸透してから数年が経っていた。国を追われたときは50人からの大所帯であった芳賀一族は、放浪を重ねるうちに死別や逃亡を繰り返して、20人ほどに集団に目減りしていた。経過途中、盗みや追い剥ぎに走ったこともある。彼らは生きることには貪欲になっていた。

先住者はそんな芳賀一族と同じ目をしていた。地区を分けてではあるが生活を共有していくうちに、彼らのそれまでの行状が明確になる。ざつと言えば、彼らは野盗だった。戦国の乱世において大きく膨れ上がった犯罪集団。織田信長の治世以後の駆逐で勢力を削がれてはいたが、多くの者は未だに近隣の山野に潜み、山賊を生業としていた。

気性の荒い彼らとの関係は、自然、芳賀一族の弱体化を招いた。なにせ、彼らの集落の女に誘われて手を出しただけで、問答無用の斬撃に見舞われるのだ。わずかな芋畑の占有権も、当然、彼らの物だった。芳賀一族は常に困窮していたが、彼らの悪事に加担することで、なんとか餓死者を出さずに済んでいるといった惨状だった。

台地の上を強い風が吹き荒れる。江戸時代中期。

この集落に一人の旅人が訪れた。：いや、旅人だったものが入り込んだ。疲労からか瀕死状態だった彼は、すぐに息を引き取る。集落の人間は、彼から金目の物を奪い、着物を剥ぎ、髪まで剃った。売れるものをすべて切り取られた彼の惨めな遺体は、どの家屋の敷地にも捨て置かれるのが嫌だという理由で、台地のの上まで運ばれた。当時、相当の標高のあったその場所は、秋口に取れた野菜の乾燥所になっていた。湿気が低く風の絶えない環境は、岩盤を突き抜けるほどの強さを持った野草や収穫物を、1日で干物へと変えてくれたからだ。

冬の保存食の傍らで干からびていく遺骸。遺棄当初は猪の餌にもなるのだろうと思われたそれは、どんな運が働いたのか、捕食されることもなく、綺麗なミイラとなっていった。

真冬。集落にとって一番辛い季節。もともと、わずかしかなかった食料の備蓄は、早い段階で底をつく。山賊稼業も思わしくない。旅人が雪深い山を避けて正規の街道を通るからだ。村の男たちは、その街道辻まで遠征する日が多くなった。当時は、大通りとはいえず、日が暮れてからの往来はごく少数だったそうだ。特に足並みの乱れるポイントを狙って待ち受ければ、リスクを最小限にして成果を得ることができた。

残された女や年寄りはいじっと待つしかなかった。生まれたての赤ん坊が凍死や餓死するのも珍しいことじゃない。そのために女はたくさんの子どもを産んだ。現代では到底イメージできないけれど、貧困の中の人間の営みは、動物のそれと変わらなかつたようだ。

そんな中、寒風荒ぶ台地に、何か飢えを凌ぐものがないかとやってきた先住者の一人が、臀部を切り取られた例のミイラを見咎めた。明らかに人の手による損傷。村へ下り、仲間を問い質すが、誰も事情を知らないという。先住者たちは、今度は芳賀の一族のエリアにやってきて、同じように詰問した。子を生んだばかりの母親が、当たり前のように答える。

「ああ、食った。食わなければ乳が出ない」

「飢饉の時に、人間が同族を食うことは、たまにあつたらしい。けれど、この集落ではそれは禁忌だった。許せば、お互いを食い合うことになる。だが、少人数で定住せずに放浪してきた先祖には、そういう理屈がわからなかつたんだな……」

街道での強盗稼業を終え、村に戻ってきた男たちが見たのは、怯えて家に引きこもる芳賀の一族の面々と。腹を割かれて放置された母子の遺骸だった。

緊急で合議が開かれる。食人に対して強い嫌悪感を示す先住民に、芳賀が懐柔にかかる。

「儂らの先祖が治めていた土地では、時折やって来る薬売りが、人間の肝や心の臓から作った丸薬を売っていた。手先のできあがつたばかりの胎児を見たこともあるらしい。今も、江戸城下では、幕府がそういう物を許可していると聞く。仲間を殺して食えとは言わん。だが、行き倒れや襲撃で絶命した者を食うことは許してもらえないだろうか」

芳賀の一族の中には『生きることが価値』という信念が根強かった。このような惨劇があつたとしても、時が経てば、また同じ事をする輩が出るだろう。

「そのような話は信用できん。薬売りなど、この集落には来たことがないし、話も聞いたことがない。人間が人間を食うなどと、幕府が認めるものか」

一方で先住民の懐疑心も強固だった。

「だったら江戸へ出て確かめようではないか」

芳賀の提案に先住民も乗る。

そして、江戸に出た彼らが見聞きしたものは、処刑した罪人の肝臓が労咳（結核）の薬として高値で取引されているという事実だった。

「なぜそんな知恵をつけてしまったのかのう…」
芳賀の言い分が通ったはずなのに、爺さんは暗い表情を変えなかった。

死体が金になると知った先住者は、江戸市中で商いをしていた薬売りに声をかけた。集落にはたくさんの死体がある、と。それはそうだ。略奪を生業としている彼らは、他所者を殺すことを厭わない。事情を知らない薬売りは興味を示した。結局、それが買い手の第一号となった。以降、噂を聞きつけた同業者が途切れることのない訪問を繰り返す。

集落は潤い、人々は活気づいた。台地の上には、いつも、腐らせないように戸板に並べられた遺体が、かさかさしほと萎んだ音を立てていたそうだ。

「明治政府が正式にそれを禁止してから、この土地は忌地として扱われるようになった。儂らの子どもの頃に、もう台地の高さは半分になっておったが、それでもここは、屍の台地、『屍ヶ台』かばねがだいなどと揶揄されていたよ」

老人の話が終わる。

俺は芯から冷えた自分の腕を無意識にさすっていた。…姉貴のマンションの住所は『川根ヶ台』と言った。

「芳賀さんの一族は、この辺りに居残ったんですね。なぜ？」

死体売りで潤沢な資金を得たはずの彼らが、忌地を出ることもなく留まっていることに、疑問を持つ。

「儂らは罪を償っていかねばならんからな」

老人は、やっと明るい笑顔を取り戻して答えた。

「この話も次の世代に伝えていかねばならんのだが、家族でさえ聞きたがらん。まったく情けない」

サチさんと涼二くんが聞いてくれて良かったよ、と話を振られて、俺は頭を掻いた。姉貴もバツが悪そうな顔をしている。

「あ、もう1つだけ聞いていいですか？先住民の方々は、今はこの土地には？」

芳賀一族にとって微妙な立場だったはずの彼らの行く末が気になった。

「大方は他所に行ったが、一部分だけ残っている。サチさんのマンション周りに固まっておるよ」

爺さんの説明で、俺にはすべての事象が繋がった。

屍ヶ台 2 (後書き)

莊園制度(地頭や地頭代)や労咳の薬等の記述は、一応、史実を元
にしています。ただ、この話のケースは完全にフィクションです。

屍ヶ台 3 (前書き)

『屍ヶ台』の章のラストです。

芳賀さんの邸宅を出て、また細い小路を歩き始めた俺と姉貴。頭上から降ってきた気の早い落ち葉に、姉貴の肩がビクツと震えた。

「…んなビビるような話じゃなかったろ…」

過剰な反応を咎めながら、でも俺自身も重苦しい気分を払拭できなかった。

「だって…」

姉貴は苛いらついた様子で、目の前の小石を蹴る。

「私のマンションの建つところで、よりによって食人があったなんて…。今度から肉料理が嫌いになりそうだわ」

「ほら、その程度の認識だろ？」

どこかズレてる姉貴の感覚を笑いながら、俺は言った。

「同じ土地とはいえ、時代が違いすぎるんだよ。気にすることじゃない」

「でも、江戸時代ってそんなに昔でもないのよ。たかだか…えっと？何年前？」

「自分から反論しておきながら、答えを俺に求めるなよな」

呆れる。子どもの頃からこうだ。負けず嫌いの姉貴が吹っかけたトランプを収束するのが俺。西暦換算して、差分を出す。

「2011 1868…150年ぐらいだな」

「ほら。芳賀のお爺ちゃんのお祖父さんが生きていた年代ぐらいじゃない」

「芳賀の爺さんを基準にするかあ？」

95歳の長老は、平均寿命82の日本においても特殊だと思っぞ。

「一般的なサイクルから見ても、六代か七代ぐらい前の先祖の話だよ。そう思えば、ものすごく昔じゃないか」

「そうね…一代前も、そろそろ記憶が薄くなってるわ」

「親父のことぐらい、覚えといてやれよ」

姉貴がボケで言ってると思いたいが、お袋といい姉貴といい、親父に対しての姿勢は、未だに辛辣だ。本当に忘れようとしているのかもしれない。

「酒に溺れなくなる時期ってのは、あると思うからさ……」

手の付けられないアル中だった親父。飲酒中に運転した車で他車を巻き込み、自身と3人の命を奪った。残されたお袋は、被害者からも親父の親族からも、自分の身内からさえも非難されまくって、結局、未だに精神を病んでいる。

「リヨウちゃんはよく知らないから肩が持てるのよ。早死してくれたのはありがたいけど、最後まで大迷惑な人だった。大っ嫌い」

まったく『記憶が薄れてはいない』様子の姉貴は、忌々しそうに吐き捨てた。

「俺は、親父にいてほしかったと思うことが、たまにあるよ」

ぼそつと呟くと、姉貴は、

「代わりに姉を頼りなさい」

と虚勢を張って反り返った。

苦笑しながら、それはもう無理だ、と内心で拒否する。まだ親父が存命だった小学生低学年の頃、母方の親戚の家にあった大きな柿の木の実を収穫を手伝う家内行事があった。脆い幹先の実を取るのには体重の軽い子どもの仕事。でも、俺は怖がって登らなかった。親戚連中が揶揄する中、3つ年上で、そろそろ体も大きくなりかけて姉貴は、俺の名誉を回復するために、注意喚起も聞かずに枝に取り付いた。鮮やかなオレンジが地面に落とされたのとほぼ同時に、姉貴の体も骨折の音を響かせて落ちた。鎖骨と上腕と肋骨にヒビ。それ以来、俺は姉貴がしゃしゃり出そうになるたびに、怖気を吹っ切って自ら行動するようにしている。

「ところで、お爺ちゃんの話、参考になったの？」

考え事をしながら歩いてきた俺の前に、急に姉貴が立ち塞がった。

「この土地に幽霊が出てもおかしくない曰くがあるのはわかったけ

ど、それが私の家に来る理由は、やっぱりないと思うのよ。だとしたら、夜中のあれはお隣じゃないの？」

「もちろん、俺もそれが、一番、合理的な解釈だと思ってるよ」
そう断言しつつも、気の晴れないしこりが依然として残ることを、姉貴に伝える。

「なんて言うか…。相手が生身だとすると、しっくりこない感覚っていうのがあるんだよ。さっきの爺さんの話の、死体を並べた、って表現を聞いたときには、これだって思ったんだけど」

「ミイラ？確かに音は軽い感じだったもんね。でも、忍び足で来るのかもしれないじゃない？ゾンビの訪問よりは、私にはしっくり来るわよ」

姉貴はおどけたように肩を竦めた。

「音だけじゃないんだ」

自分の中にくすぶる警鐘を説明しあぐねて、俺は無意味に指を空回りさせた。

深夜に、ドア一枚を挟んで対峙したあの存在は、俺にとっては『恐怖』の対象ではなかった。『畏怖』だったんだ。強烈な悪意を発するそれに、体が痺れたように動かなかった。ドアを開けて姿を見せれば、自分というものが破壊される。それぐらい、絶対的な脅威だった。

「お前に説明してもわかんねえよ」

脳天気な顔の姉貴に悪態をつくくと、

「わかるように説明できないあんたのアタマが悪いのよ」
と即座に言い返された。

来た時とは逆に、入り組んだ住宅街を抜けると、突然、農村地帯のような緩やかな風景が広がった。比較的、車通りの多い道路を挟んでの向こう側は、菜園や耕作放棄の田園が広がっている。ススキの群生が真昼の太陽を受けて金色に透けていた。冷たさの交じる秋風がその穂を揺らしていく。

「こつちの賑やかな方が、芳賀一族の住処で…」

背後を振り返って確認する俺の隣で、姉貴が反対側を指さす。

「こつち側が先住者の居住区ってわけね。私のマンションも含めて？」

確認するので、

「当然そうだよ」

と肯定しておいた。

「だったら、先住者同士で、もっと仲良くしてくれればいいのに」
古い家屋の庭先に、腰の曲がった老婆が立っている。こちらが会釈をすると、礼儀程度には反応が帰ってきたが、すぐに目を逸らされた。

「自分たちが虐げてきた芳賀さんたちが、すぐ目の前で繁栄してるんだ。先住者同士が繋がれば、芳賀さんたちを刺激するとも思ってるんじゃないの？」

俺は自分の至った結論を姉貴に話した。

明治以降の近代に入り、屍ヶ台の人々は、それまでの行為を非難される立場になった。今でこそ芳賀の爺さんは『償い』を口にするが、当初は、そんな余裕はなかっただろう。人殺し、人食いと蔑まれた彼らが、その非難から逃れようとするには、お互いに罪をなすりつけ合う必要があったのではないか。

初期に力を持っていたのは先住者の方だったのかもしれない。だから、集落で温存していた資金を持ち出して、他所に移ることができた。その波に乗れなかった芳賀氏は留まることを余儀なくされる。そのうちに先住者の数が少なくなってくる。居残ったのが先住者の中でも力のない家庭だったのも容易に想像できる。そうなれば立場の逆転が起こるのは必然だ。

芳賀氏の台頭。それに対しての先住者の弱体化。開拓地の中で大きく敷地を広げる芳賀氏の横で、細々と田畑を営む先住者たちが、芳賀氏の視線を現在まで気にして暮らしていたとしても、俺はそれ

ほど不思議には思わない。田舎には往々にしてある現象だ。

芳賀の爺さんが、この土地の歴史を広めようとしていることにも、関連があるのかもしれない。実際の爺さんの話は、芳賀氏にも先住者にも偏らない、かなり中立な立場を取っていた。けれど、周囲はそう見ないだろう。芳賀氏によって継承された事実が、芳賀氏に有利な内容に傾いていると見るのが普通だ。一方的に悪にされると思い込んだ先住者たちが、ますます萎縮してしまうのは、仕方がないことだと思う。

そうなると、芳賀の爺さんと交流を持つ姉貴は、自分で思っている以上に、この地区で孤立しているのかも。芳賀の爺さんから、いろいろ吹き込まれていると誤解されて…。

「なあ姉貴…、カイさんって…頼りになるの？」

夜中の訪問者の件だけじゃない。こういうしがらみの強い土地で、姉貴のように社会的に暮らしていくには、家族の支えが必要だろうと思った。

「カイさん？」

突然の話題転換に戸惑ったような姉貴は、すぐに苦笑して首を振った。

「…よくわからない。虐待の声が聞こえ始めてから、ずっと相談はしているのだけど、自分には関係ないだろうう的な反応ばかりで…」表情を曇らせて、視線を落とす。

「結婚前は、あんなに精力的だったのになあ」

変貌ぶりが、俺にとっても腹立たしかった。

「カイさんにとっては、私を手に入れることが1番の目的だったみたいよ。ほら、私って意外に誰にでも好かれるじゃない？そういう相手と結婚したら優越感に浸れるんでしょ」

茶化しながら、でも寂しそうな本音を、姉貴は覗かせた。

うちに戻ってくれば、と言いかけて、やめる。

「また泊まりに来てやるよ。カイさんがいないときに連絡くれ」
言外に義兄への嫌悪感を滲ませて言うと、姉貴は明るい顔になって、

「ありがとう。あんまり何度もリョウちゃんを使うのもなあ…と
思ってたけど、そう言ってくれるなら遠慮なく」
と笑った。

「いいよ。ヒマだし」

普通に忙しい毎日だったが、なんだか俺も依怙地になった。体たらくな義兄と同列に成り下がりはたたくはない。

姉貴の失踪 1 (前書き)

この章は5000文字を超えています。短気な方はお気をつけ下さい。

姉貴の失踪 1

翌出勤日に会社に出向くと、いつものように先輩が先に出社していた。今度は俺のほうから挨拶して、にじり寄る。

「おはようございます。アレって解析できました？」

先輩はパソコンの画面を睨みながら、言葉だけ返した。

「おう。できたが、あんまり効果なかったな。暗いのはどうしようもないぜ」

「まあ、仕方ないですね」

俺は礼を言っつて、忙しそうな先輩から離れた。実は、姉貴の家に取り付けた監視カメラの映像ビデオを、彼に預けてあった。

というのも、生憎、監視を始めたその夜から廊下の常夜灯が切れてしまい、映像には暗闇しか映ってなかったからだ。

「こんなタイピングで明かりが切れるのが厭らしいな」

姉貴と2人で、そう零^{こぼ}したが、マンションの共用廊下の備品では、ありがちなことなのかもしれない。安物の解像度しか持たない白黒画面は、時折、目障りなノイズが走るぐらいの変化しか捉えていなかった。

その話をすると、先輩が、

「俺、映像解析ソフトを持ってるぞ。ビデオをハードに落とし込んで、解析してみてもやろうか？」

と提案してくれた。喜んで預けたのが5日前だ。

自分の席につき、仕事の段取りを準備し始めていると、一段落つけた様子の先輩が話しかけてきた。

「そっちの状況はどうなんだ？長老から面白い話は聞けたのか？」

「うん。かなり手応えのあるのを」

先輩には逐一の報告がしてある。芳賀の爺さんの話を掻い摘もうとしたとき、入口が開いて、彩ちゃんが顔を出した。

「おはようございます。今日は寒いですね」

まだ10月の内だというのにコートを着込んで、手袋までしていた。

「寒がりなんだ？」

と聞くと、

「はい。冬は苦手」

と、ピンクに染めた頬を緩ませて、微笑んだ。こんな女の子の前で食人の話ができないよなあ…。先輩に目配せし、話題をいったん打ち切ることにする。

昼休憩時、彩ちゃんを連れて外に出た。先輩は奥さんの手弁当だし、事務所を空にするわけにはいかないんで、1人で居残ってもらっている。だいたいはこのパターンで、俺は彼女とのプライベートな時間を楽しんでいた。

4つ年下の彩ちゃんが今年の4月に配属されたとき、人手不足の事務所で先輩と陰気な顔を付き合わせる毎日を送っていた俺は、彼女をどう扱っていいかわからず、最初は会話を避けてすらいいた。女に免疫がなかったわけじゃない。特に、口うるさかったり、ウツ気味で気遣いが必要なタイプには、身内柄、精通していたと思う。彩ちゃんは、むしろそういう要素のまったくない娘で、明るくて賢いし、優しいし、可愛いしで、完璧すぎて馴染めなかった。そんな俺に、警戒心のない彼女から積極的に近づいてくれて、仕事を通し、良好関係を構築していった。

…恋人とかいるのかな…。ものすごく気になってはいるが、聞いて肯定されるのもショックなので、未だにその課題には手をつけないでいる。

昼食には事務所のそばの喫茶店を選んだ。ここは窓が大きくて、太陽の熱がよく入る。少し眩しいけど、窓際の席を取った。まだ暖房のかかる季節じゃない。寒がりの彼女にとって居心地の良い場所が、ここしか思いつかなかったんだ。

「水嶋先輩って、神様とか宗教とかに興味あるんですか？」
着座してすぐ、彩ちゃんはそんな質問を投げてきた。

「え？なんで？」

彼女とその手の会話をした覚えのない俺は、記憶を辿りながら聞き返した。

「なんとなくです。ほら、お姉さんのマンションの話のとき、すぐに『幽霊』とかって発想してたでしょう？神秘的なものに興味があるのかなと思つて」

大きな瞳を輝かせながら、彩ちゃんは付け足す。

俺は少し考え込んだ。『神秘』とか『空想』とかは、興味の範疇じゃない。むしろ現実的な理屈を大事にする方だ。

「幽霊だと思つたのは、人間と仮定するには無理があつたからだよ。普段は、そういうご都合主義な発想はしないよ」

そう伝えると、明らかに彼女は不満そうな顔をした。

「そうなんだ…」

「？」

どういつ答えが望みだつたのかな…？

注文を済ませた後も、質問は続く。

「神社とかに行くのも…嫌い？」

ねだるように言われると、なんだか無碍むびにするのも可哀想な気がしてきた。

「そついうのは神秘とはまた別の話。寺なんかにはわりと立ち寄りよ。土地の由来を調べるのが好きなんだ」

寺社は初期の頃から人間の生活圏に置かれることが多い。だから、創建時の謂れなんかを調べると、思わぬ歴史を知つたりする。でも、彩ちゃんは、

「お寺じゃなくて、神社、です」

と依怙地にこだわった。…意図がよくわからない。

「何かの宗教に興味があるか、つてことを聞いてんの？」

強引にでも思い当たるのは、彼女がある種の信仰にハマつていて、その話をしたがつているのかということだった。

「う…。その…、そついうの、嫌いだつたり…します…？」

言いにくそうにテーブルに視線を落とす様は、凶星だと見ていいんだろう。

…彩ちゃんが宗教かあ…。そういえば、彼女の誠実な性格とか、他人との関わりの深さなんか、ちよつと特殊な気もするな…。

「嫌いつてほど、よくは知らない。ただ、少し警戒は持つてる」俺は正直に答えた。新興宗教の脅威は見聞きしている。彩ちゃんはその類いの宗教に心頭していたとしても、同調する気にはなれなかった。ただ、彼女の成り立ちを見ると、全否定する気は起こらないだから、

「彩ちゃんが好きなものを非難する気はないよ。今の君から変わってほしくはないからさ」

とフォローも入れておいた。

「そういうことじゃ…」

まだ彼女は納得しない。なんだろう。もっと積極的に勧誘されたほうが良かったかな？

うだうだと煮え切らない呟きを繰り返す彩ちゃんの前に、ランチメニューが運ばれてきた。華奢な体のわりに大食いの彼女は、

「えつと…今はいいです。今度、また続きに付き合ってください」と表情を一変させて、嬉しそうに箸を握った。

まだ続くのか、この話題は。……………ま、でも、見てて面白いから、いつか。

事務所に戻り、午後の仕事を手早く済ませて定時を待った。先輩は解析済みの映像を持参してきていた。彩ちゃんの退社を待って、再生する約束になっている。

簡単に説明してもらったところによると、ビデオには、はっきりとした『異変』は映っていないかったようだ。録画したのは、姉貴が就寝する23時から朝までの7時間ほど。問題の時間も稼働していたはずなんだけどな…。インターホンは鳴ったのかと姉貴に確認したら、

「鳴ったと思うけど、ここのところ神経質になって、昼間でも幻聴が聞こえるのよ。だから、確信はできない」

と答えられた。精神的に参ってきてるんだらうか…。

「お疲れさまでしたあ」

と、にこやかに帰る彩ちゃんを見送って、先輩を急かした。事務所にある37インチのテレビにPCからケーブルを繋ぎ、

「7時間は付き合ってられないから、先に送るぞ」

と2時間ほど再生をすっ飛ばす。午前1時頃の映像が大写しになった。

「何も見えないですね」

思っていた以上に闇の濃い処理画像に、少し、がっかりする。

「室内灯を消すか。そのほうが目が慣れる」

先輩は立ち上がって、入口横にあるスイッチをフル消灯した。

音のない黒い画面が延々と流れていく。監視カメラにはマイクがついていない。時折、白い帯が現れて画面が揺れた。その時だけ、わずかに背景の固形物が浮き上がる。

「アナログのノイズ除去は難しいな。ブロックノイズならある程度は行けたんだが」

言い訳する先輩が啜えた煙草の火が、暗い室内に火の玉のように浮いていた。

「ブロックノイズ？」

聞き返すと、

「モザイク」

と返ってくる。

「普段、何のビデオを解析してんだよ？」

「つっこむと、」

「そういう指摘を受けるから、彩っぴを先に帰したんだらうが」と低い笑い声が響いた。

30分ほどが何の変化もなく過ぎた。確かに、目の慣れのせいか、

背景が認識できるようにはなった。玄関ドアの上部に取り付けたカメラは、向かい側の高さ1.5メートルほどのコンクリート塀に向いている。塀の上辺が、真っ直ぐな横線となつて、画面の中央を切り裂いていた。

「何か動きましたね」

塀の向こう側の風景に当たる闇の中で、俺は、手招きのような仕草を見せる物体を見つけた。

「でも、人間の動きじゃないような…」

それは単調な動作を繰り返す。前に倒れ、後ろに倒れ、また前に戻る。

先輩は黙つたままだ。

俺はまた注視を再開した。白っぽい色をした、本当に、ちょうど人間の掌ぐらいの大きさだった。他のパーツは見えない。塀の向こうに、よきつと腕だけ出している。そんな印象だった。何だろう…。

「…最初に、うちの妻が気づいた。それ、ススキじゃねえか？」

先輩が奇妙に抑えた声で指摘した。

「ああ、なるほど」

俺も納得した。マンションの周囲、特に共用廊下の面する裏手は一面のススキ野原だ。そうやって見ると、何の不思議な光景でもなかった。

「疑心暗鬼で見ると、それらしく見えるもんだな。正に『正体見たり枯れ尾花』だ」

自分の網膜がいかにも信用に値しないかを知って、苦笑する。

「案外、インターホンが鳴ったのだから、風で何か当たっていたのかもしれない」

ビデオに映る深夜の時間帯が、ススキの穂を揺らすほどの風を伴っているのだと知って、そうこじつけることにも成功した。

先輩は黙つたままだ。

俺の導いた答えに不満を持っているのがありありと感じられた。

でも、他にどんな解釈があるだろう。何かを見落としているか、俺？

「お前のお姉さんの部屋、マンションの高層階じゃなかったか？」
意味ありげな声音で聞かれて、俺は、暗室の中、首を縦に振った。

「そうです。3階にある」

高層というほどではないが、あのマンションの最上階に位置する部屋だった。質問の真意を掴もうと先輩を見返ると、テレビ画面からの僅かな反射に映えた黒い顔が、無言で顎をしゃくる。

「もういっぺん、しっかり画像を確認してみる。お前がおかしいと思わないんなら、それでいい」

「……………」

少し巻き戻し、言われたとおり、もう1度、テレビを凝視する。黒い画面の中央やや上部寄りに、コンクリート塀の上辺が映っている。コンクリート塀が真っ黒な障壁となっている向こう側、マンションの敷地の外に当たる場所で、白っぽい植物の穂先が、よく見ると大量に揺れている。

「…遠近感がちょっとおかしいですね」

本来なら、3階から地面に生えたススキを見ているのだから、もっと小さく感じてもいいはずだ。

「でも、ここまで暗い動画だと、おかしいとも言い切れないなあ。脳が勝手に錯覚してるのかもしれないし」

自分の感覚に、自分で反論してみる。と同時に、日のあるうちに見た姉貴の玄関先の光景を反芻した。3階から見下ろした場所にススキの原は見えていたか。…見えていた、と思う。

「もつとはつきりとした…例えば、いるはずのない子どもがいたとか、骸骨やミイラが立っていたとかいう証拠が出てほしかったんだけど」

理想を呟くと、先輩が、やっと自分の意見を口に出した。

「俺も奥さんも、その遠近感には引っかかりを覚えたよ。でも、俺たちは現場に行ったことがねえからな。お前がそれほど違和感を感じないんなら、大したことでもないんだろう」

「違和感を感じたとしても状況の説明ができませんよ。姉貴の部屋がスキの原っぱの真ん中にワープしたとも思っただんですか？」
俺は笑って、先輩の疑問を杞憂とした。

そのとき、いきなり事務所の入口あたりから、第三者の声が聞こえてきた。

「あの…何やってるんですか…？」

入口脇のスイッチに手をかけたまま、点灯をためらっていたのは、もう30分以上も前に帰ったはずの彩ちゃんだった。俺は、反射的にテレビを消した。

「なんだ、まだいたのか」

先輩も所在無げに腰を浮かしてから、彩ちゃんにスイッチを入れるように指示する。

明かりがついた。蛍光灯のちらついた光線が目染みる。彩ちゃんが近づいてきて、俺の隣に放つてあったビデオの空パッケージを持ち上げた。

「これ、なあに？仕事のビデオ？」

どうやら、俺と先輩で勉強会を開いていたと勘違いようだ。向上心の強い彼女は、新人だからと、残業を免除したり、講習から外したりすると、逆にいじける。

「違うよ。いたってプライベートなもん」

俺がやんわりとパッケージを取り上げると、猜疑心の拭えない視線で見返された。

「男同士の鑑賞会っていやあ、わかるだろうに。お前も見たいの？」

先輩が迷惑なほど絶妙なフォローをしてくれたお陰で、

「いえ、いい、いい」

彩ちゃんは真つ赤になりながら、俺たちから距離を取った。…こうやって評価が墮落していくんだろうな、俺…。

「んで、なんで戻ってきたんだよ？忘れ物か？」

俺がデッキからビデオを取り出している間も、それと平行して先輩が2本目の煙草に火をつけている間も、彩ちゃんは、少し離れたところに佇んで、特に何をやる気配もなかった。

「忘れ物じゃなくて…その…水嶋先輩を待ってたんです…」
縮こまったような仕草を見せながらそう答える彼女に。

俺の思考は停止した。

代わりに、先輩がニヤつきながら背中を叩く。

「良かったなあ、ミズシマくん。彩っぴが『君と2人で』帰りたいってさ」

「え、べ、別に約束してたわけじゃ…」

慌てて言い訳しかけたが、でも考えてみれば、約束もないのに待っていてくれた彩ちゃん的心情は、充分に喜んでいいものだと思います。
「…ちよつと待ってて。すぐ支度するから」

自分のパソコンの電源を落としながらそう伝えたと、ウィンドウの落ちていく画面の中に、弾けた笑顔で頷く彩ちゃんが映った。

親父が他人を殺したと聞いたとき、俺は、俺にはもう誰かに好かれる資格なんかないんだと覚悟した。今まで、他人の好意に触れる機会が皆無だったわけじゃない。でも自分からそれを拒絶した。関わることで、周囲に親父の罪が知れるのが怖かった。非難され続けて、だんだんと狂っていったお袋のようになるのが怖かったんだ。

それなのに、…何故だろうな…、彩ちゃんだけには、その冷え固まったガードを解くことができる。信頼、というのは、こういう感情のことだろうか。なかなか心地良い。

「お待ちどう。行こうか」

抑えてはみたが、どうしても浮かれる声で、俺は彩ちゃんの横に並んだ。先輩に挨拶したかったが、直前にかかってきた電話が深刻そうな様子なので、ジエスチャーだけ見せて帰ろうとする。

「待て！…水嶋、お前に電話…」

突然、先輩が声を荒らげた。険しい表情で受話器を突き出す。

「え？」

戸惑うと、

「お袋さんから」

と補足が入る。それから、こう付け足した。

「お姉さんが、隣人を刺したらしい」

意味が頭に入って来なかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7532x/>

屍ヶ台

2011年11月5日03時22分発行